

●**座長（櫻井）** — ありがとうございます。豊富な資料をパワーポイントで提示していただきましたけれども、時間の関係ですべて見ることはできませんでした。田村さんのレジュメは2部ありまして、かなりしっかりしておりますから、そちらのほうでご覧いただくことにしたいと思います。

田村さん自身の問題意識は、すでにレジュメに「問題の所在」というかたちで三つ挙がっております。一つは、口述と記述を今後の研究のなかでどのようにドッキングさせながら活用していくのか。歴史学の立場から見れば実証性、厳密な文献のテキストクリティックがあるわけですが、われわれ文化人類学の場合には主として流動性の強い口述であるため、裏づけの保証がないというあたりが歴史学のほうから攻撃される要因かもしれません。その二つの方法を今後の研究にどう生かしていくかという問題意識が一番目のポイントです。

二番目に、自分自身は人類学的手法でコミュニティースタディーをやりたいということです。人類学的手法というのは、私自身の考えでは一つにはフィールドワークをすることですが、既存の文献・記録ではなくて、自分で歩いて、見て、聞いて収集した生の一次資料に基づいてやるのが基本です。ですから、それは文字ではない非文字資料をいかに活用するかという問題になるかと思えます。

三番目に、人類学的手法といったときに、われわれが語るのは現在です。いまここに生きている生活者のことを語るわけですが、過去を語らないわけではありません。その場合の過去は記録ではなくて、現在生きている人たちが過去をどう見ているか、現在の人たちの、ある意味では歴史の記憶を掘り起こして、過去といま生きている人たちがどのように対話をしているのかということから、過去を再構築していこうという視点だと思います。この点については、田村さんもたぶん同じお考えだろうと思えます。

われわれが過去との対話といっても限度があるわけです。1千年も2千年も前のことができるわけではありません。その場合に、田村さんのフィールドでは時間の上限を1860年代、すなわち140年ぐらい前ですけれども、私たちにすると明治維新のころに設定しています。

いま考えてみると、明治のころを覚えている人がいるのかいないのか。われわれの両親のさらに上になるわけですが、そうした人たちが語る歴史の記憶のなかには、おそらく語りの二重構造があるのではないかということです。語りのなかに、すでに伝聞があるのです。そういう語りの二重構造が、歴史学の人から見れば現実ではないと批判されるわけですが、そのあたりのことを、われわれも今後は方法論としてどう考えていくかということも、いずれ考えなければならぬと思えます。そのような問題意識で、今日は一つのケーススタディーとして、西北陝西省の回民起義についてお話いただきました。

それではコメンテーターにコメントをしていただきたいと思います。一つには記憶ということ大きなテーマに取り上げていらっしゃると思いますので、記憶を民族学研究にどう生かしていくかについて、ご自身のお考えがありましたら、それに触れながらコメントしていただけるとありがたいと思えます。

それでは最初に小熊先生、どうぞよろしくお願いします。

●**小熊** — 今回のシンポジウムの特徴はコメンテーターの意外性にあると思えます。なぜこの人がコメンテーターになっているのかという意外性でありまして、私もなぜ田村さんのコメンテーターになっているのか、自分でもわかりません。

例えば田村さんの発表にしてみても、地域から見れば周星先生がやっていたらしゃるかもしれませんが、回民ということであれば西澤先生ですし、口述と記述ということであれば瀬川さんでしょうけれども、そういう方々をフロアに置いておくということは、あとの質疑応答を活発化させようという意図があるのかもしれませんが。

ということで、私のコメントは二つです。一般的には内容に関するコメントと、方法・視点に関するコメントという二つの方向からコメントが可能かと思いますが、私は内容についてはほとんどコメントができませんので、方法・視点のほうからコメントさせていただきたいと思います。

自己紹介でも申しましたように、私の専門とフィールド、つまり民俗学的方法と、漢文化の周辺としての沖縄の視点からコメントさせていただきたいと思います。

具体的に言いますと、一つは櫻井先生がおっしゃったように、やはり方法です。中国の人類学研究において、伝承とか伝説をどのように考えていけるのだろうかという方法論的なところ。そのコメントが一点と、もう一点は今回のメインテーマであると思いますが、漢民族と周辺民族の関係をめぐる歴史的な記憶。その二つの点からコメントをさせていただきたいと思います。

一番目の伝承・伝説について、田村さんのほかの文章にも書いてあったかと思いますが、中国の人類学は、コミュニティスタディーズの方法から始まって、そちらの方法が主流でした。つまりそれは、中国の人類学が対象としてきたのは社会的事実とか歴史的事実であることから、客観的な記述とか分析というものが基本になってきたと思います。

ところが、そのなかに伝承とか伝説という部分の語りを、どのように主体的に取り込んでいけるのかを田村さんの発表では問題提起しているのではないかと思います。それは最近、歴史学のほうでもいろいろと記憶に関する研究がありまして、私もそれを使って論文を書いたことがあります。つまり記憶というのは、過去の歴史的なできごとがあるわけです。それを記憶として貯蔵しているのではなくて、そこから現在の状況に合わせて、人々がどのように再解釈して理解しているかであって、記憶が現在のその集団のアイデンティティ、あるいは考え方と深くかかわることであると、小関隆さんなどが言っているわけです。

そういう視点で言えば田村さんのご発表も、現在の漢中に住む人々の生活を意味付ける枠組みとして伝説・伝承があるのだという考え方でいいと思いますが、これを中国の人類学研究の中でどのように積極的に取り入れていけるのか考える必要があると思います。そのような場合、伝承とか伝説というものは、いわゆる客観的な人類学的方法論からいくと、あまり信憑性がないものであって、社会事実の実証的な研究の中で積極的に取り入れてこなかったわけです。

実は日本民俗学の手法は逆であって、伝説とか伝承を積極的に取り入れて、その人々の文化に対する考え方を拾っていきこうとします。そういうあり方もこれからの中国研究で必要ではないか、ある部分においては有効ではないかと考えます。

田村さんは伝承を事件史の記憶と、生活のなかに組み込まれた回民蜂起の記憶と、二つに分けていますけれども、後者のほうは断片的であってなかなか調査しにくいし、短期間ではとらえにくいという方法論上の困難があります。しかし、これも民俗学的に言うと、むしろ後者を積極的に研究の対象として分析することによって、民族的境界という目に見えない文化の網の目が見えてくるのではないかと思います。ただし、民俗学的方法論で外国人に日本がわかるのかという議論がいまでもずっと続いておりましたが、その逆に、日本人が中国に行つてこういう視点で調査をした場合、はたしてどれだけわれわれがその実態に近づくことができるかという疑問が常にあるわけです。しかし、それは視点と方法さえしっかりしていれば、何とか克服していけるのではないのでしょうか。

こういう視点と方法は、すでに瀬川さんの『族譜』の本のなかにきちんと描かれています。あの研究は一族の記憶としての過去の事実が記録になっているわけです。族譜という一族の記録の中に、自分たちの過去が中国の歴史に結び付いていく過程とか、風水伝承などが豊かに語られています。一族の伝承や記憶が、その地域やそれを越えた国の歴史と結びつくのと同じように、田村さんの対象とした村の伝承や記憶をすくい上げて分析することによって、民族境界やお互いの民族をどう認識しているかというアイデンティティの分析と結び付いていくでしょう。そういうなかで伝承・伝説の分析は有効になっていくかもしれないと、一つ指摘させていただきます。

時間がないので、二つ目はもっと簡単になってしまうかもしれません。

二つ目は、漢民族と少数民族の関係をめぐる歴史記憶という部分です。橋本萬太郎さんは第一次民族圏と第二次民族圏とおっしゃっていたと思いますが、現在の中国の図版のなかでの少数民族が入っているのが第一次民族圏で、いわゆる儒教文化、漢文化圏といきましょうか、朝鮮・日本・琉球・ベトナムを含む東アジアが第二次民族圏という区分があったと思います。そういうなかで私がやっている琉球は、第二次民族圏になるわけです。このなかで福建省と琉球の500年にわたる交流の歴史的事実がありまして、それは歴史学で研究されています。実は現在、沖縄の村に行っているのと話を聞いてみると、中国と関連する語りがいろいろなところに入っています。

例えば、沖縄で有名なハーリーという<sup>はりゅうせん</sup>爬竜船行事があります。糸満に行きますと、これは中国から先祖が持ってきたものだと、いまでも語られております。南部の奥武島では、なぜハーリーが始まったのかというと、中国人が難破したのを助けるために村人が競争して船を出した、だから爬竜船が始まったのだと。助けてあげたお礼に中国から観音様をもらって観音堂があるのだとか。そういうふうになら中国との関係が語られています。

昨日田島先生とお話したのですが、<sup>ダーフアーク</sup>打花鼓という中国の太鼓踊りがあります。沖縄に2カ所ぐらいありますが、歌っている歌はまったく言葉がわかりません。歌っている人たちもわからないのです。つまり、口承伝承で中国語で歌っているはずですが、聞いても中国語はわかりませんし、口承で伝えられていますから何かわかりませんが、でも、いまだにその祭りをやっています。しかも、これは中国から誰々が持ってきたという伝承もあります。

個人的レベルでは、旧家に行くと、この香炉は自分の祖先が中国に行ったときにもらってきたのだとか、いろいろと言うわけです。つまり中国との関係、前近代の歴史の記憶が伝承のなかに入っておりまして、それが沖縄では非常に肯定的に語られています。

例えば「唐船ドーイ」という歌があります。中国の船が那覇の港に入ってきたぞという歌ですが、どういうときに歌うかという有名なエイサーの定番です。東京で若者がエイサーを踊るときに、「唐船ドーイ」を歌いながらドンドンと踊るわけです。

ところが沖縄は、大和文化や薩摩文化が民間のなかにはあまりありません。つまり、中国は肯定的に、まだまだ数え切れないほど沖縄の文化のなかにあるわけです。その逆もあって、福州にも琉球のいろいろな文化が入っていて、渡邊先生と行った金將軍の伝説とか、琉球の<sup>さっぽうし</sup>冊封使が海難に遭ったときに媽祖が助けたというのが、福建側の媽祖廟のなかに語られていたりします。そのように、福建側にも琉球の記憶が民衆のなかにあります。われわれが考えている以上に両者の文化的距離は近いわけです。

琉球との関係を言いましたが、昨日から出ております民族の問題のなかにも、お互いの歴史記憶とか伝承・伝説をもっとすくい上げていくことによって、民族境界のアイデンティティが分析できるようにならないかなと思います。

今日の田村さんのとり上げた回民伝承も、そのように積極的にすくい上げて、いまは漢族になっていますが、回民との事実の関係性をもう少し分析的にできないかと考えた幸いです。少し長くなりました。

●**座長**— ありがとうございます。2点お話をいただきました。一つは伝承・伝説をめぐる方法論を、今後われわれの民族学研究テーマのなかでどのように取り組んでいくかということの方向性に関してです。もう一つは民族の境界、民族間関係という漢族と少数民族をめぐる歴史的な記憶、あるいはアイデンティティというような分析の際に、記憶の問題をどう理解していくかについて、沖縄のご自身の研究事例も挙げていただきながらコメントしていただきました。

では、次に吉原先生、お願いします。

●**吉原**— 吉原です。私はいまここに座るまで、自分のコメントする順番を知りませんでした。黄色いプログラムは出ていたらしいのですが。

小熊先生のお話とかなり重なることを想定してきたものですから、いまここで内容を変えながら話しますので、ちょっとどのような話になるのか始めてみないとわからないという、とんでもない状況です。座長のお話と重ならないように、小熊先生のコメントとも重ならないようにということでお話をしていきます。

田村さんのレジュメは2種類ありますが、二つ目のほうに問題意識が書かれています。一番目はもうおっしゃったわけですが、二番目に「二つ目に」と書いてある1ページのところで、人類学と問題設定。より大きな議論に結び付けていくものとして、コミュニティースタディーズを超えるにはどういったものが大切なのかということで、田村さんの発表では「地域」という言葉を使って取り上げられたわけです。こういう問題設定は重要ではないかと思います。

もう一方でわれわれがよく耳にする言葉で、コミュニティースタディーズを超えて中国の人類学を変えていく、発展させていくためには、例えば圏（リージョン）という言葉も使われていたと思います。言葉はどちらでもいいのですが、大きな中国ですから、国内においても地域とか圏域のなかでの比較、それらの地域間の比較、圏域間の比較も非常に大事だろうと感じました。

ところで、昨日私は出られない予定が最後のほうは間に合って、三尾先生のお話を途中からうかがうことができました。その際にコメンテーターがお二人いらっしゃいまして、出るだろうと期待していたお話があまり出ませんでした。それをなぜここで取り上げるかということ、総合討論につなげるために、私は今日ここでどのような話をしなくてはいけないかと考えてのことです。

小熊さんがおっしゃったのですが、私もなぜ自分がここにコメンテーターとしているのか、よくわかっていませんでした。かなり違った話に拡散するということでしょうか、収斂させるのは総合討論の座長のお役目だと勝手に思っていますので、少し拡散させてしまうかもしれませんが、申しあげます。

昨日、三尾先生の最後のところで、漢化した平埔族という言説が台湾で出てきたと紹介されました。これは私としても非常に面白い現象だと思いましたが、私は、大陸のフィールドとしては広東省の開平県といいますか、北米大陸に華僑を送ったところとか、せいぜい華僑が出たところ、いわゆる僑郷ということしか私は関心を持っていません。

ですから、台湾のことを考えるのであれば、広東省はどうなのでしょう。瀬川先生がいろいろと南雄伝説などを紹介されていますが、いま広東省では伝統を再構成してつくっていく過程がおこな

われています。これは伝承を基にして、中国が経済開放以降、ローカルな歴史を見直して重視していくなかで出てきたことだと思います。漢族が南雄からずっと南下して、広東省一带に広まっていたとか、福建省でも似たようなことがあるかもしれません。

客家というのも、漢民族の流れをくんだ人たちがずっと移動して漢化を広めていって、いまの中国ができたと言いますが、よく考えてみますとそれだけではなくて、当然、広東省・福建省・その他、中原以外のところにいた先住民族といいたましようか、原住民といったらいいのでしょうか、そういう人たちは漢族がやってきて、数は少なかったけれども漢族と通婚したり、あるいは経済関係を持ったり、政治的支配関係、被支配されるということを通じて漢族の文化を受け入れて、いまの広東人になっていったということがあると思います。

台湾のような言い方ができないわけではありませんが、それはしていません。していないのはなぜかという、これは言うまでもなく政治状況があるからです。台湾の国民党がなければ、平埔族うんぬんという言説は出てこないわけです。陳水扁政権になってから、そのようなことが見られるようになったというわけです。

チベットの話もそうでしょうし、あちらこちらでこういう話が出てくると、中華人民共和国はたいへん危機的な状況になるわけですから、特に西域を考えたときには、かなり深刻な問題につながりかねないと思っているわけです。ですから回民というのは、中国本土の内部の漢民族が主流である地域、マジョリティーである地域にもかなり分散して、あちらこちらに拡大しながらも、かなりまとまったコミュニティをつくって生活をしているわけです。

この西北地域は、言うまでもなく西アジアにつながっているわけです。つまり、イスラムの発源地に近いところに位置しています。新疆ウイグルというのはよく知られているように、王柯先生のご著作もあります、東トルキスタンの独立運動が実際に起ったところ。そして新疆省がソビエトに接し、また西アジアのイスラム文化圏につながっているという意味で、ここはリージョンとして見ると、内陸部の回族が住んでいるところとはちょっと違うと考えるべきではないかと、私は思っています。

内陸部の回族を除いた少数民族と漢族の接触は、先ほどのセッションでもありましたが、数は少ないものの漢族は雲南のチベット族が住んでいる地域と、大伝統と小伝統が接触する場であったわけです。マイノリティーであっても大伝統を背負った漢族と、そうではない人たちという状況があったわけです。

しかし、田村先生がお話をされた西北地方、トルキスタンにつながっていくようなところで見られる回族と漢族が接触する状況は、特に取り上げられた時代でいきますと、帝国清朝、満族という少数民族が支配した時代です。しかし、清朝は大伝統である漢族の文化を受け入れて、それによって支配の正当性をつくりあげていったわけです。西北地方というこのフロンティアでは、ほかの中国の内陸部などとは、漢族とそれ以外の民族集団との接触状況は反対の状況にあったのではないかと思います。

西域に展開するイスラムの大伝統を背後に持っているのが、陝西省の漢中ではなかったかと思えます。当然ここは漢民族の歴史が古いわけです。唐の長安がありましたし、長安ができてまもなくのころ、イスラムができてすぐ中国へ入ってきたというのは、こういう地域へ入ってきたわけですから、回族の大伝統の発源地であるわけです。ですから、回族と漢族との接触状況があったわけです。そういう意味では、ここではそのことをマークしておかなければいけないと思います。

回族そのものについては、調査の主たる目的としていらしたわけではないと書かれていますし、

それが故に回族側の語りを調査された理由をおっしゃっているわけですから、これをうんぬんしてもしようがありません。小熊先生が話されたことは、私は別の言葉を使って言おうかなと思いましたが、いわゆるオーラルヒストリーの学問としての特質という問題です。

事例をとおして提起された歴史の認識のしかた、それと、それをどのように表現するかという問題。縮めて言い換えれば、歴史認識と歴史叙述の問題でしょうか。今回のご発表は、こういうものを提起されているのだらうと思います。

ポストモダンの歴史学というくくりで話されてきたということで、われわれが共通に直面している問題設定状況ではないかと思います。こういうことは総合討論で話していく必要があるでしょう。人類学からする歴史、あるいは歴史学からのフィールドワーク。つまり、オーラルヒストリーみたいなアプローチ。このような問題がどのように統合され、あるいは連携していくのか。これについては、このような問題があるという指摘に私はとどめたいと思います。

オーラルヒストリーのことが、ほかのコメンテーターから出ないと思いますので、重ならない話にしようということですからちょっとお話ししますと、西洋史学、われわれとは違った世界で研究をしている人たちのグループ。これはイギリスのバーミンガムの文化学センターというところが始めた民衆の記憶グループといいますか、Popular Memory Group と英語で言われているグループの主張が、一つの特徴を持つのだらうと思います。

もちろんアメリカの学派もありますが、それはさておいて、オーラルヒストリー学会が近年結成されて活躍していますので、そこで紹介されている、例えばポール・トンプソンの書いた本を酒井順子さんが訳していて、この人の書いたものを以前に読んだことがありましたので、その受け売りみたいなことをしようと思います。『THE VOICE OF THE PAST』は1980年にオックスフォード大学から出ていて、訳が2000年に出ています。もうご存じかもしれませんが、『記憶から歴史へ』というタイトルが付けられています。

これがオーラルヒストリーの学問の一つのテキストといいますか、基本的な文献になるのではないかと思います。ここでは言うまでもなくフィールドワークの重要性が述べられています。ポール・トンプソンはもともと文献史学をきちんとやって、それをどうやって解釈するか。資料やデータそのものは語らないのであって、それをわれわれが知りたいと思っていることの説明に、どのようにつなげていくのかを考える人です。

ですから、文献調査を行ってかつ聞き取りをすること、特にテープレコーダーを使って録音していくこと、それ以外に映像を使うとか、パフォーマンスなども直接映像で記録することができるけれども、こういう聞き取りヒストリーをやるときの技術についてもかなり言っているわけです。

ここで先ほども出ていますが、書かれた文書資料、データというものが、実証史学の分野では非常に重要視されていまして、聞き取り調査は非常に軽視されてきたということがありますが、決して資料として優劣があるわけではないと言っています。ですから私の言葉では、資料の優劣ではなくて、両方それぞれに長所もあり欠点もあるわけですから、相互補完的に資料を生かして歴史を叙述していくことが必要だと言っています。

もう一つ言っていることは、当然書かれた資料でさえバイアスがありますし、取り上げた題材とか、時期的な問題、期間、これも恣意性があります。かつ、残っていてわれわれが利用できるものは断片ですから、オーラルヒストリーで聞き取られた資料と似たような限界を持っているのだと言えます。語られた事実を物語りにしていくのは、研究者の側でもあるわけですし、歴史の説明として使っていくことが、われわれ研究者の課題でもあるわけです。ですから、オーラルヒストリーの人

たちが言っていることは、more history、さらなる歴史ということです。

私が言おうと思っていた海外の華人社会の話をする時間がなくなりましたので、別のところで言わせていただくことにしたいと思います。ちょっとまとまらなくなりましたが、時間ですのでこれで終わりにします。

●**座長**— ありがとうございます。時間の関係でお話を途中で切らせてしまったようで、すみませんでした。

では、三番目に馬場先生、よろしくお祈いします。

●**馬場**— 馬場でございます。私は歴史学をやっております、そういう観点から今回の田村先生のご発表には、たいへん啓発されました。

特にここにいらっしゃる方は文化人類学をおやりになる方が中心ですので、フィールドワークということなのでしょうけれども、どうも私も、例えば中国へ行っても、どこに地方档案馆があるか、どこにどういう文書があるかに関心を持っています。そういう点から、田村先生の本日のご発表に非常に啓発されました。

ただ、私はあくまで歴史のほうにこだわりたいと思っております。それでいくつかご意見を申しあげたいと思いますが、最初に、1950年代土地改革のときに、この地域はあまり地主制が発達しておらず小農が多いというお話がありました。

この問題から二つの問題が出てきます。一つは、1950年代の土地改革の時期と、回民起義が起きた1860年代。回民起義が起きた地域は、ご指摘にもありましたように、回民はこの反乱とともにいなくなって、新しく人々が入ってきて村が再編されています。したがって1860年代の時点、村が再編する以前の段階で、はたして小農が多かったかどうかという問題があります。

なぜそのことにこだわるのかというと、参考文献にもありますが、范文瀾の回民起義の枠組みを決めた研究が、回民起義の原因として清朝の抑圧と漢人地主の抑圧があったということを書いており、すなわち土地集中が進んでいるということを強調しています。そういう意味では、回民側の地主に対するいわゆる反封建闘争的な側面が最初から成り立つという意見があるわけです。

ところが、仮に1950年代の土地改革のように、小農が多くそれが1860年代までさかのぼれるならば、范文瀾のそういう位置付けが当てはまらなくなるかもしれません。ただし、先ほども言いましたように村が再編されていますので、そのへんは范文瀾の意見と関連して再編されて以後、あるいは1860年代はどうなったとお考えなのか。范文瀾の意見に対して、もし1860年代小農化していたといえ、范文瀾のシェーマが崩れるわけです。もちろん最近の研究を完全にサーベイしていないので、すでに明らかになっていると言えるかもしれませんが、でも、田村先生のお考えをお聞きしたいと思います。

二番目に地域社会の問題です。この地域は最初に、前のパワーポイントに出てきましたが、1862年から63年に清の多隆阿軍と戦い敗れて回民が甘粛に逃れ、その後西捻軍の侵入以降、甘粛から陝西に戻ったら今度は左宗棠に追われる、そういう意味では清朝軍に壊滅的にやられていきます。そういうなかで多くの回民が反乱に参加して、甘粛へ行って、その後陝西に戻ってくるけれども結局破れて甘粛にとどまります。甘粛にとどまって戻れなくなってしまう。それ以外にも攻撃を受けたから逃げてしまうということもありますが。

そのあとに、いま申しあげたように漢人による新しい村が、移民も含めて育ってくる、そういう

地域社会だと思っています。その結果、口述についても二つの問題が出てくると思います。一つはご指摘のような140年後の現代に聞き取り調査をすれば、回民側からの被害中心の記述になるだろうと思います。

私は歴史のほうなので歴史にこだわりたいと思いますが、こういう調査の語り部の人たちが、田村先生のレジュメでは、「厳密な歴史像の再構成というよりは現代を生きる人々にとって意味を見出せる、今日の状況を説明するために遡求的に発話される歴史であって文字記録とはその性格を異にするもの」であると。これには私もまったく賛成です。

ただし、もう一つはいま申しあげた回民側が村を離れたという事例を、田村先生が出された資料でも確認できます。それはもちろん、私がいままでの歴史学の成果を踏まえているから、そういうことが言えるといえ言えます。

例えば、1、2例を挙げますと、事例4番の最後のほうに、渭城府から出撃した回民側の中継地となって食料を供給するようにしたけれども、清軍が到着したので、まわりの村落（漢人の村落）を恐れて、彼らと一緒に回民になって西北へ逃げて行ったとあります。8番にも同じように、そのように村を離れたと類推される事例が出ていていると思います。10番も同じです。

ですから、こんにちの状況を説明するために遡求的に発話される、それはそのとおりだと思いますが、そういうものから私としては同じ資料を見ながら、あえて過去の歴史像を再構成するほうに充分使えろと考えます。村から多くの回民が出ていって、新しい村が再構成されていったことから派生してくる問題かと思っています。

三番目に郷土志、あるいは県志の性格ですが、いまの繰り返しになりますが、当該地域の回民の多くが移動してしまい、移民によって村が再建され、人的構成が変化してきます。そういうなかで先ほどの郷土志や挙人というお話がありました。県志はご存じのように、赴任してくる知県や民国期ですと県長のために書いているわけです。地元の文人やいわゆる郷紳が書いています。すなわち、秩序を担う連中が書いているわけです。

民国期の県志について、私が研究をしております紅槍会に関連して、華北のものをいくつか見ましたけれども、民国期の北京政府の時期、1928年に国民政府が統一するまで、基本的に叙述の形式は変わりません。1928年以後の国民政府の時期になってくると一部変わってきますが、国民党の県政府が強いところでは国民党の訓政期の政策を前面に出して、孫文を最初に出すことがあります。それはあくまで国民党の勢力が強いところであって、基本的にはあまり変わりません。

そういうところで紅槍会などは、こういう県志でどのように書いているか。紅槍会は紅の槍といいますが、これは義和団の再来なので、神々が下ってくるという降神、それから附体ですね。身体に取りついて、刀や槍が入らなくて不死身になって、「刀槍不入」と言われています。そして、こういう紅槍会の各開祖がいるわけですが、開祖が何か説を唱えると、「妖言人を惑わす、愚民これに従う」と書かれて、だいたいパターン化しています。

そういう点において、実は郷土志・県志を、回民起義を鎮圧した左宗棠と同じような文化的素養と価値観を持って書いていると思います。ただ、県志ですから、より地域に密着したことが書かれていますけれども、やはり地域秩序を担っているから、戦闘の叙述や被害状況に限られるのは当然かなという気がします。そうすると、それ以上を突破するのが口述調査だと思います。特に視点の点では圧倒的に違うと思います。

もう一度申しあげたいと思いますが、従来の回民起義を鎮圧した側と、基本的には郷土志、県志を書いている人たちの価値観、人的構造が同じであると。ただ、ここは回民がほとんど残っていま

せんが、仮に回民に調査をされても、おそらく漢人からいかに被害を受けたか、清軍からいかに被害を受けたかという話になるのではないかという気がします。両方をクロスオーバーさせると面白いと思いますが、この地域では無理だと思います。

ただ、資料を見ますと、事例9、10などは対立している事例と共存している事例が書かれているかと思います。対立の事例という、例えば先行研究によれば、回民のヒツジが放牧されて漢人の麦畑を荒らしたので、怒った漢人がヒツジを殺してしまって械闘が起こるといった事例が紹介されていると思います。そういうものと見比べて、両者の共存ということが、たいへん私は興味深い事例だと思います。

もう一つ、口述調査があつて文献資料があるということで、私は対比できるのは義和団ではないかと思います。義和団については山東大学の調査団ですとか、90年代に日本人も入って調査をしています。そこで、例えば義和団の場合は、実は八カ国連合軍と清軍に攻撃されたあと、義和団に参加した連中はそれぞれ郷里の農村に戻っています。義和団に参加した連中の子孫の口述調査と文献調査の関係を参考にすることができるのではないのでしょうか。

それともう一つ、漢族・少数民族ということとは離れるかもしれませんが、実は義和団の要因でキリスト教徒、教民のコミュニティーと漢人のコミュニティーの問題があると思います。つまり、対立しつつ共存しているということです。

例えば対立している例ですと、山東省の西北部の威県を中心としたところですが、玉皇廟をキリスト教教会に変えるかどうかで30年間争っているわけです。これは義和団発生の要因になります。もちろん、玉皇廟はいわゆる漢人で、キリスト教会は教民のほうです。それから、神々を迎えてお祭りをやる迎神賽会のときに、教民は参加しないという文化摩擦が生じています。そういう点では回民と漢人の社会での関係と、ある種並列に考えられるのかなという感じがします。

義和団は村に残りましたから、私のやっている紅槍会は義和団の再来なのです。つまり、義和団という名前が使えないので、村落自衛の紅槍会と名乗っているけれども、全く義和団なのです。それで残っていきますので、先ほども言いましたように義和団について調査可能です。

文献資料と記憶された口述資料の関係ですが、先ほど言いましたように、従来の残された資料がある限られた層が書いたもので残っています。すなわち湘軍に参加した連中にしろ、記録を残している層があるでしょう。それから郷土志や県志も、やはり文人層なり、あるいは郷紳層なりが書いたものを残しています。それとはもっと別の視点からの歴史があるだろうし、それは個人史、家族史、村落史であったり、殊に具体的事例がわかるのは口述史だろうと思います。

私もほんとうはフィールドワークをやりたいので、ぜひみなさん方で「おまえも付録としてついてきてもいいよ」と積極的に声を掛けていただくと、特に歴史的なことに参加させていただくと幸いです。若干時間をオーバーしまして失礼いたしました。

●座長— ありがとうございます。多分野的研究から見るという点で、まさに歴史学の違った視点から細かいお話もいただきながら、コメントとご質問をいただきました。

すべてに答えている時間はないと思いますが、小熊先生と吉原先生のコメント、そして馬場先生が具体的な質問してくださったと思いますので、そのなかから田村さんが適宜選んで、一つか二つぐらいお答えを頂けますでしょうか。お願いいたします。

●田村— 非常に勉強になるコメントをありがとうございました。時間の関係でそういったことに

なってしまっていたいへん失礼なのですが、こちらから答えられるものを答えさせていただきます。

小熊先生にいただいたコメントですが、そのなかでも二つ目として紹介されて、沖縄の例を用いながらおっしゃっていただいたこと。最終的には積極的に取り上げ、少し分析的にということですが、私はその点もこれから考えなくてはいけないと思っています。

こういった非常に断片的なかたちで列挙する一つの理由は、私はこの地区へはお葬式の調査という名目で入っておりますので、どうしても伝承が広がっている地域それぞれを訪問して、過去についてどうだったと聞くことができない状況があります。ですから、まだまだ資料的にも足りない部分があると思っています。今後こういった方向をしっかりとやりたいと思います。ありがとうございました。

それから吉原先生にいただいたコメントのなかで、文字資料についても、ある意味書かれた資料というものも恣意的であり、われわれは断片的にしか得ることしかできないけれども、ある種の想像力を持ってそれを正しく読み解いていくことについては全くそうだし、ある意味でフィールドワークと同じかなと思っています。たしかに文字と、見たもの聞いたものという違いはありますが、われわれは断片的なものにしか触れることができなくて、そのなかでより適切な理解であろうものに近づくためにフィールドワークをしていると考えておりますので、啓発されるところが非常に多くありました。

付け加えますと、旧来の県志の部分で、あのように文字化された、固定化された記憶があるにもかかわらず、新しい地方志のほうではそれが逆転します。その部分も、やはりある種の枠組みというか、枠組みに表れる恣意性だと私は考えております。

最後に馬場先生には、具体的かつ多方面からさまざまなコメントをいただき、どうもありがとうございました。小農が多いという分析ですが、1860年以前についてどうだったか、私はちょっと答えられません。以前の状況がどうだったかはわかりませんが、回民蜂起を起源として、外地からの多くの客民と呼ばれる人たちが入って、非常に困難ななかで地域を再興していきます。そのことが大きく影響して、1950年当時の小農が多い状況に結びついていると考えていますので、それ以前にある種の関中の地域特性みたいなものがあって小農が多いとは考えていません。おそらく事件の影響が大きいのではないかと考えております。

三番目におっしゃった郷土志や県志の位置付けについてですが、これはまさに馬場先生がおっしゃるとおりだと思います。県志は鎮圧側と価値観を共有しているのであつた記述になりますし、それを踏まえると興味深いのは、清朝末期に書かれた郷土志と、47年が最後の編集になりますが、49年以前の地方志がほとんど同じように書けるというのは、おそらく鎮圧側の価値観は、その時期までいろいろなかたちにせよ続いていて、その担い手は一緒だったということだと思います。それが変わってくるのが非常に興味深い現象なので、今後そういった方向についても検討していこうと思います。

そのほかについては申しわけありませんが、具体的にあとでまたいろいろと聞いてください。



●座長— ちょっとお待ちください。時間をどうしましょうか。そろそろみなさんおなかもすいていらっしやると思いますが、質疑がまったくなしではさみしいと思いますので、あとお二方だけ質問を受けます。では、加々美先生。

●加々美— 一点だけですが、門外漢ですので簡単におたずねします。小熊さんから出た民族境界をどう考えていくか。民族境界に深くかかわることです。昨日のシンポジウムでもいくつか問題が出ましたが、民族のアイデンティティというものは主体の側からある認識が提起され、それに対して客体に立って、主客の往来のなかで歴史的に蓄積され固められていきます。あるいは記憶もまたそういうものだと考えておきたいのですが。

いま田村さんからいただいた報告とレジュメのなかで、多声という言葉があります。32ページの「フィールドで語られる回民蜂起——『回回乱』をめぐる多声的な状況——」というところで、多くの声という「多声」という言葉を書かれています。これはミスプリントではありませんか。

●田村— ミスプリントではありません。

●加々美— ミスプリントではない。では、多い声ですね。ところが、もう一つの報告、37ページの段落のかわる前のところですが、「他声的で断片的である口述」とあって、ここは他人の「他」と書いてあります。

●田村— そちらがミスプリントです。

●加々美— こちらがミスプリントですか。その上のほうに「単声的に」とありますね。単一の「単」。単声と多声という言葉は、私の理解からいくと、ここでは伝承されるものの主体が実は問題になっているはず。つまり、多いとか単独であるというのであれば、言葉の意味からしますと、主体が多様であるか単一であるかということを言われているように受け取れます。

ところが、ここで挙げられている事例を見ますと、この主体が漢なのか回なのか。受け取る側としては、どちらかという漢であると受け取れます。そうすると、伝承のなかで漢の歴史的タイプは変わってきますから、田村さんが予稿集の38ページで「現在の人々の生活を意味づける枠組み」と言われているように、「現在の」ということがあるために、伝承は常に現在の人々の生活のなかから現れます。

そうすると、それは歴史的には内容的にも変わるということになりますが、回というものに対して漢がどのように歴史的に対応してきたか。そして現在はどうであるかということが、ここで読み取られなければいけないわけです。残念ながら、口述は歴史的に過去充分蓄えられたものがなく、民間説話集についても1989年ですから、比較しようもないと思いますが。

もう一点、その点で言いますと、ここにちょうど出ていますが西北大学がやった歴史の最終的な研究物では、結論が人民の立場になっています。つまり、これは漢の立場なのか、回の立場なのか、あるいは国家の立場なのか。通例では、人民の立場とは国家の立場だろうと思います。しかしここで「人民の立場」というのは、本来は回と漢の関係に関して、回のほうからする漢圧迫を漢搾取運動として描き出したかったのではないかと、聞き取り調査も入っているわけです。にもかかわらず、それはなぜだろうかという疑問が出てきます。つまり、回の立場からの聞き取りが十分にできなかったのか。あるいはそうではなくて、回のほうからの漢圧迫・漢搾取運動としての聞き取りができなかったと考えるのか。

なぜこのようなことを聞くのかというと、このシンポジウム全体が漢化と華化を中心問題だとしているからです。その場合に華化というのは、どちらかという国家的、世界的な、中国世界としての世界が漢化していく、漢化させていくという論理のはずでして、そういう風に伝承を読み替えることができないのかということをおもいます。

なぜかという、1900年代初期の地方志では満・漢・回だったものが、どうして現在は満が落ちてしまうのか。これはもちろん国家の論理とかかわりがあると思いますが、そのへんも少しだけお

答えいただきたいと思います。ちょっとコメントになっていたかどうかわかりませんが、長くなりました。すみません。

●**座長**— どちらが先だったかわかりませんが、伊藤先生と渡邊先生、1分でしたらお二人ともご発言ください。1分でいいですか。では、伊藤先生からお願いします。

●**伊藤**— こういうシンポジウムのあり方と関連しますが、細かいことをこの場で議論して時間を浪費するのはどうかと思ひまして、やはりそれは研究会等でおこなうことにして、より大きな展望とか、方法論的な問題をみんなが探るという方向が必要だと思います。

その点から言えば、まさに歴史の多声性とか、いま先生が言われた主体性ということが、この複雑な中国社会において非常に重要なテーマだと思います。特にドミナントのものと、周辺化されたマイノリティーのものです。

ですから少数民族、あるいは少数者、さまざまな社会セクターの主体ごとに、過去の経験をどのように認識して、それをどのように表象するか。そういう大きな展望のなかで、これは何も回民だけの問題ではなくて、さまざまな事実、さまざまな現実これから適応できるような議論であって欲しいと思いました。

実は私も3月に『歴史の多声性』という論文を書いて、歴史認識はどのように未来に、過去の経験をどのように現在・将来に対する知識として共有すべきか述べました。そういう意味では、人類学的な乱暴な歴史研究かもしれないけれども、歴史学者の言うような例えば国家とか王朝が、歴史知識を共有するための学問といいますか、ある特定の使命を担った学問から離れて、もう少し広い視点から人類学は歴史をとらえようとするので、せっかくいろんなディシプリンの方がここにおられることですし、しかも中国という生の素材があるので、そういう方法論的な展望を探るようなシンポジウム、セッションであってほしいと思います。

●**渡邊**— ちょっと批判だけ。田村さんは、コミュニティースタディーを超えてと言っているのですが、これはコミュニティースタディーと関係ない次元の研究だと思うのです。私も中国のコミュニティースタディーをやっているつもりですが、コミュニティースタディーというのは人類学のなかでコンプレクスソサイエティー（複合社会）のなかの研究であって、特定の村落だけを取り上げた研究ではない。いわゆる戦前からずっと国家的な歴史や、ネットワークの研究を視野に入れてやってきたわけです。コミュニティースタディーを超えてと言っているが、君の研究は却って後退している。人類学の歴史をもう少し踏まえたいうえでやっていくべきです。費孝通だって明らかに国家的な視野を含めて書いているのです。それからネットワークも。ですから、費孝通を超えてほしい。コミュニティースタディー以下ではないか。全く別の次元です。ちゃんと人類学史を踏まえて欲しい。それが私がこの間人類学会でやってきた関東地区研究懇談会の研究の目標ですね。

●**座長**— ありがとうございます。田村さんも言われればなしでは落ち着きがないでしょうから、伊藤先生あるいは今の渡邊先生の発言について、ちょっとだけでもよいのでリプライを。

●**田村**— どうもありがとうございました。ここで語りを取り上げたことについて主体の話ができましたが、私が興味深くおもったのはしばしば外側からの眼差しというものと、例えば内側にはほんとうはあったものが消えていくみたいななかで、ある種の表象みたいなものが先鋭化してくるといえるのは、もうすでに研究があると思います。

けれども、この事例の場合、本来いまの地方志で書かれている主体であるところの回民は、ほとんどいないのです。ですから、そういったなかでこういった言説や新たな記録が歩いていくというのは、どういうことなのかというのが私の知りたい部分になっています。ですので、システムが非

常に入り組んだかたちになっており、誰が何を言い記録されるというような、ある地域での出来事がその地域で完結して記録化されない部分があります。もともとの関心はそんなところで始めました。

●伊藤— 違う状況だったら、また面白いですね。

●座長— ありがとうございました。イスラームそのものの問題については、梅村先生やら、西澤先生やら、王柯先生やら、ほんとうはもう少しご意見があるかと思えますけれども、もう時間がありませんので、総合討論でご意見があれば、また言っていただきたいと思えます。ありがとうございました。